

# 次世代が語る日本人「戦争花嫁」移民

土屋 智子

## はじめに

第二次世界大戦後のアメリカによる日本占領の結果、アメリカ人兵士・軍属と日本人女性の結婚が生じた。これらの結婚は国際結婚であったこと、および、異人種、異文化間の結婚であったことから多くの議論を呼んだ。アメリカ占領を機にアメリカ人兵士と結婚した日本人女性は「戦争花嫁」と呼ばれている<sup>1)</sup>。1980、90年代以降、日本人「戦争花嫁」移民にインタビューを行い、彼女たちの語りを記録するオーラルヒストリー研究の動きが高まった。それ以前は、社会学者によって戦後直後に生じた特殊な結婚がうまくいくのかどうかに焦点を当てた研究はあったが、「戦争花嫁」が移民として歴史的に記録に値する研究対象となることは戦後長らくなかったため、「戦争花嫁」の語りに着目する研究は有意義であった。著者も2004年から3年間海外移住資料館委託学術研究プロジェクト「海を渡った花嫁たち—日本人女性移民の研究—」により「戦争花嫁」移民の方々、約40名にインタビュー調査を実施した。ここ3、40年、日本人「戦争花嫁」本人にインタビューを行い、「戦争花嫁」移民の結婚、移住、アメリカ生活についての記録が残されたことは大変意義深い。しかし、それらはまだ歴史の発掘程度にとどまっていて、彼女たちが後世に与えた影響についての検討においては不十分である。そこで、本研究では2つのドキュメンタリーに焦点をあて、日本人「戦争花嫁」の子供および孫の視点に着目してその歴史的意義を問う試みを行う。日本人「戦争花嫁」本人に加え、彼女たちの子供や孫の語りにも着目することにより、次世代によって、日本人「戦争花嫁」移民の結婚、移住、アメリカ生活がどのように解釈されているのかについて検証してみたい。

扱うドキュメンタリーは次の2つである。一つ目は「七転び八起き：アメリカへ渡った戦争花嫁物語」(“Fall Seven Times, Get Up Eight: The Japanese War Brides”) で、2015年にルーシー・クラフト、キャサリン・トールバート、ケレン・カズマウスキーの3人の監督によって制作された。彼女たちは3人とも日本人「戦争花嫁」移民を母親に持つ。26分のドキュメンタリーは歴史説明のナレーションと共に、娘3人とそれぞれの母親が戦後直後の結婚、移住、アメリカ生活について語り合うという構成である。2015年8月に完成すると、BBCワールドニュースにて取り上げられ、世界200か国以上に紹介された。ドキュメンタリーは主に日本とアメリカで上映され、2015年10月にボストンのアジア系アメリカ映画祭を皮切りにアメリカ各地の映画祭で上映された。2016年には第15回アメリカ、ダラスで開催されたアジア映画祭において最優秀賞を獲得している。日本では東京、市ヶ谷のJICAちきゅうひろばや横浜の海外移住資料館、各大学にて上映

された。日本女子大学では2016年3月19日に学術交流シンポジウムに監督の1人、ルーシー・クラフト氏を招聘してドキュメンタリー上映を行った<sup>2)</sup>。

もう一つは、2019年8月17日に放映されたNHK BSドキュメンタリー「戦争花嫁たちのアメリカ」で、藤田英世プロデューサー、小柳ちひろディレクター率いる制作班によってNHKとテムジン社の共同で制作された。ドキュメンタリーは1時間40分で、主にカリフォルニア州に在住している日本人「戦争花嫁」による結婚、移住、アメリカ生活に関する語りを放映している。「七転び八起き：アメリカへ渡った戦争花嫁物語」を制作した3人の活動も紹介している。ドキュメンタリーの後半には、日本人「戦争花嫁」移民だけでなく、子供によって語られる母親の結婚、移住、アメリカ生活について取り上げられ、エンディングではそれらが孫によって語られる構成となっている。

ドキュメンタリー「七転び八起き：アメリカへ渡った戦争花嫁物語」は監督を「戦争花嫁」移民の娘たちが務めているが、ドキュメンタリー「戦争花嫁たちのアメリカ」ではNHKとテムジン社の制作班によって作られている点で、ドキュメンタリーの性質は異なる。しかし、どちらも「戦争花嫁」移民の語り、子供たちや孫の語りに重きを置いており、本論文の主題について分析するに値するドキュメンタリーだと考える。これら2本のドキュメンタリーから、日本人「戦争花嫁」移民本人だけではなく、子供や孫の視点にも焦点をあて、日本人「戦争花嫁」移民の結婚、移住、アメリカ生活が次世代にどのように解釈されているのかについて検証する。

## 先行研究概観

日本人「戦争花嫁」に関する先行研究は、1. 戦後直後に生じた異人種、異文化間結婚として捉えたアメリカ研究者による社会学的研究、2. 主にアジア系アメリカ人研究における多人種・多文化社会アメリカでの「戦争花嫁」移民の意義に関する研究、3. 日本の移民史に位置付け、戦後の特殊な移民の例としてその歴史を探求する日本人研究者による研究、という主に3つの領域がある。1は、日本人女性と白人男性の結婚が何万件も生じたことは歴史的に例がなく、白人とアジア人種の結婚はうまくいくのであろうか、文化や人種の境界線を越えた結婚は成り立つのであろうかという社会学的な見地からの研究である。この領域では、シカゴ学派と呼ばれるシカゴ大学の社会学者によって、アメリカに大量に移民が流入した19世紀後半から20世紀初頭にかけてアメリカ人となる人々の出身国、人種、文化の変化に着目し彼らがアメリカ社会に溶け込む際の同化変容についての研究が20世紀を通して進められた。この流れの中で1950～70年代にかけて、日本からきた女性移民がアメリカ人の妻として、また、アメリカ人としてどのように変容し同化しうるのであるのかについての研究がなされた。これらは戦後の多様な人種・文化から成るアメリカ社会の実現可能性について探求するものであった<sup>3)</sup>。2は、80年代以降、アメリカ国家の中でアジア系のエスニック集団の歴史や文化をアジア系移民自身が構築する必要性が高まった際、日本人「戦争花嫁」移民をこれまで周縁化されてきた移民集団の一つとして捉えて活発になった研究である<sup>4)</sup>。研究の特徴として、戦後の混乱の中、異文化国家へ移住した苦勞という側面ではなく、戦後の多様化するアメリカ社会での貢献という側面を強調する傾向がある。また、この分野には「戦争花嫁」移民の娘が母親の結婚、移住、アメリカ生活についての意義について考察した研究も含

まれる<sup>5)</sup>。

日本の学問領域において、戦後しばらく学術的な研究対象にはならなかった「戦争花嫁」移民であるが、80年代以降、戦後の国際結婚の開拓者として捉える見方が現れた。これが3の研究領域である。きっかけは、1984年に開かれた海外日系人大会第25周年記念大会に日本人「戦争花嫁」移民の女性たちが招かれ、当時妃殿下であられた美智子さまが感謝の意を表したことが挙げられる<sup>6)</sup>。文化人類学者によって、戦後初の国際結婚として捉えた研究や、日本人の海外移住史における意義について探求した研究が進められた。例えば、2005年に文化人類学者の植木武と安富成良は、「戦争花嫁」移民の移住先の文化に対する適応具合を調査して、日本文化と欧米文化を時と場合によってうまく使い分ける能力を身に付けていると結論付けた<sup>7)</sup>。また、安富成良は「戦争花嫁」移民の1人、スタウト・梅津・和子と共著『アメリカに渡った戦争花嫁：日米国際結婚パイオニアの記憶』を出版し、近年増加する国際結婚の先駆けとして、「戦争花嫁」移民の結婚、移住、アメリカ生活、子育てを紹介して、草の根において戦後の日米の良好な関係構築に貢献していると論じている<sup>8)</sup>。日本では敗戦後、敵国の兵士との結婚による移住ということで長く研究対象として扱われなかったが、80年代半ば以降に「戦争花嫁」移民の歴史に興味関心がもたれ、さらに、戦後のアメリカとの国際関係構築の中で彼女たちの存在は貢献と捉えられるようになった。2010年にはスタウト・梅津・和子の功績が認められ春の叙勲、旭日単行賞が授与された。

## 「戦争花嫁」移民の結婚に関する時代背景

1945年8月15日、日本は第二次世界大戦において連合国軍に敗北し、占領期を迎えた。日本占領の初期、アメリカ人兵士・軍属と日本人女性の結婚は異端的で危険なものとして解釈された<sup>9)</sup>。占領が進むにつれて、徐々にアメリカ人兵士がアメリカ占領軍当局、GHQ/SCAPに日本人女性との結婚許可を要請するようになると、当局は頑なに退けた。それどころか、日本人女性との結婚許可を要請したアメリカ人兵士に対して、駐留の任期更新を禁止し、他の駐留場所へ移動させた<sup>10)</sup>。

占領を通して、アメリカ人兵士と日本人女性の結婚が快諾されることはなかったが、移民帰化法の例外として2回の特別措置が講じられた。1947年と1950年に施行された戦争花嫁法である。日本人の移住は1924年の排日移民法によって許可されていなかったが、アメリカ人兵士と結婚した日本人女性の入国を特別に許可するものであった。しかし、この二つの法律は日系アメリカ人兵士による日本人女性との結婚を想定して成立されたものであった。1947年、1950年の法律制定過程の議事録には、日本の血をひく兵士が「同じ人種の女性」、原文では“girls of their own race”、と結婚することを許可すると明記された<sup>11)</sup>。1947年の法律は7月22日より一ヶ月以内に結婚の申請をした者のみアメリカへの移住を許可するという制限が付き、実質この期間に結婚を申請できたものはわずか823人であった。この法律に付いた日数制限について議会ははっきりと、この特別措置が日本人女性とアメリカ人兵士との結婚を快諾するものではないことを示すため、と説明した。この法律で結婚したアメリカ人兵士の人種の内訳は日系アメリカ人597人、白人211人、黒人15人であった<sup>12)</sup>。

1950年8月に成立した2回目の戦争花嫁法は当初6ヶ月以内に結婚申請を行った者のみ、とい

う制限が設けられていたが、結婚申請が殺到し、結局期限が一年延長された。その後は、1952年の12月に制定されたウォルター・マッカラン法でアメリカ市民と結婚した者の移住が割り当て外で許可された。議会は日系アメリカ人兵士のために、という名目で法を成立させたが特に人種の規制があったわけではなく、1950年の法律では日本人女性と結婚したアメリカ人兵士の人種が大きく変化した。2回目の法律では合計8,381件の結婚が生じ、そのうち白人が73%、日系アメリカ人が15%、そして黒人が12%となり、実質白人と日本人女性との結婚が多くなった<sup>13)</sup>。1952年にサンフランシスコ講和条約が発効され、日本は占領期を脱したが、日米安全保障条約により米軍基地は日本に残り、米軍兵士・軍属と結婚してアメリカへ移住する日本人女性はますます増えた。1952年以降、1950年代末までに米国籍者と結婚・渡米した日本人女性の総数は3万人から4万人に達したと推定されている。

## 「七転び八起き：アメリカへ渡った戦争花嫁物語」より：「戦争花嫁」の娘たちの視点

「七転び八起き：アメリカへ渡った戦争花嫁物語」のドキュメンタリーでは、家族で、父と母の馴れ初めや結婚について会話するように、母と娘が肩を並べ合って思い出話を語っている点が特徴的である。ここでは娘の視点に焦点を当て、母親から語られる両親の結婚、移住、ルーツのある日本の文化をどのように理解しているのか考察してみたい。

まず、ドキュメンタリーの冒頭で、戦後の特殊な状況で生じた結婚であったことが説明される。例えば、キャサリン・トールバート氏の母、ヒロコは以下のように語っている<sup>14)</sup>。

ヒロコ 「天皇陛下が敗戦を告げました。私たちは泣き崩れ、口々に『信じられない』と言いました。すべて失ったんです。東京は焼け野原で何もかもが崩れ落ちていました。アメリカ軍の激しい爆撃を受けたからです。通りも見つけられず、お店も探せません。悪夢でしたね。そこから少しずつ復興して立ち上がっていったんです。」

その後、ルーシー・クラフト氏、キャサリン・トールバート氏、ケレン・カズマウスキー氏、それぞれが順番に、母親とソファに隣同士で座りながら結婚に対する両親の反応や馴れ初めについて語る。まず一組目に、ルーシー・クラフトと母親のアッコが、アッコとのちに夫となるアーノルド・クラフトとの結婚について「予定外」であったと話す。

アッコ 「軍人と出歩くことを私の親は賛成していませんでした。だからこの結婚は予定外だったんです。」

ルーシー 「本当の予定は？」

アッコ 「軍人以外と出会うことよ。大学の友人たちも同じ考えでした。」

戦後、アッコは一般の事務員には収まりたくなかったと話し、*The Nippon Times*という英字新聞に言葉を学び合うパートナー募集の広告を出した。応募があった人たちを女学校の同級生たちで割り振り、その割り振られた人がのちに夫となったアーノルドだったと説明した<sup>15)</sup>。

アツコ 「進展したのは私だけでした。他の人はカップルにならず進展したのは私だけでした。」

と嬉しそうに、そして恥ずかしそうに微笑んだ。その後、英語の勉強に意欲的なアツコに対して、アーノルドが「アメリカで学校に通ったら？」と提案し、「僕がお金を稼ぐからそれを使うといい」と言ってくれたと語った。ルーシーが、「それは太っ腹だね」と相槌を打つと、アツコが「確かにね。あれは人生で最良の投資だった、と（アーノルドが）後から言っていたわ。」と述べた。

次に、キャサリン・トールバートと母のヒロコが、ヒロコののちに夫となったビルとの出会いを語る。ヒロコの家族はヒロコがアメリカ軍人であるビルと結婚することに反対した。横浜港からアメリカに渡る際、唯一見送りに来たヒロコの母親が泣く姿を見て、もう二度と日本に戻れないだろうことを悟ったと述べた。キャサリンが「怖かった？」と尋ねるとヒロコは「怖かったし悲しくて涙が出たわ」と答えた。最後に、ケレン・カズマウスキー氏の母親であるエミコの結婚の馴れ初めについてケレンが明るい口調で語った。

ケレン 「働き者の母は豊かな生活を望んで海軍基地の近くにあるキャバレーで働き始めました。(中略)母はチケット制の踊り子でした。(中略)かなりモテたみたいですね。私の父、スティーヴも母を見初めました。祖母は彼との結婚を母に強く勧めたそうです。母は相手選びだけは日本のしきたりに従い、スティーヴと結婚しなさいという親の言う通りにしました。」

エミコ 「『彼ならあなたを大切にするわ、良き夫になる人よ』と母は言いました。母は義理の兄弟たちにスティーヴを紹介しました。みんな快く受け入れてくれましたね。」

アメリカ人兵士との結婚に対する家族の反応は3者3様であるが、3人の女性たちが語った結婚の動機はアメリカ占領における人種とジェンダーの概念をよく表している。例えばヒロコの場合、アメリカ人兵士であるビルとの結婚を家族に反対されたがそれでも結婚したいと思った理由を以下のように語った。

ヒロコ 「でもビルと結婚しなければやせ細った貧しい日本人男性の家に嫁ぐしかなかったでしょう。相手が誰であれ私には渡米することが最善の道でした。」

ヒロコの語りは、アメリカによる日本占領において誰が「魅力的」となるのかについてよく表している。愛は個人的な嗜好として捉えられがちであるが、誰が結婚相手として魅力的になるのかについて政治的に構築されている要素について無視することはできない。日本が戦争に敗北しアメリカ占領下において日本人女性にアメリカ人兵士が魅力的に見えるようになったのは、アメリカ人兵士が勝者であり、統治者であり、富と権力を握ったからであった。エミコは戦後、敗戦を迎えたアメリカ占領下について「時代は一変しました。驚いたことに再び訪れたアメリカ兵たちはとても優しく紳士的だったんです」と述べている。さらにアツコも、「アメリカ人の男性た



ちはたくましく楽観的に見えました。とても魅力的でしたね」と語っている。ここでは、個人の嗜好として自然発生的に捉えられがちな恋愛感情というものもある特定の政治的、社会的文脈の中で捉える必要性があることを強調しておきたい。

占領下、一時的に富と権力を有し魅力的に見えたアメリカ人兵士は、アメリカへ渡ると政治的に構築されていた魅力は消えてなくなった。ヒロコは以下のように述べている。

ヒロコ 「実際に足を踏み入れるまで、アメリカはとても裕福な国だと思っていました。誰もが美しい家や上等な服を持っているイメージだったんです。でもビルは農家の出身でした。彼の家族の写真を見た時想像とは違いましたね。私を待っているのは理想の豪邸ではなく農場だと知りました。」

ケレン・カズマウスキーの母、エミコの夫は下士官でそれほど裕福とはいえず、アメリカに渡るとすぐに単身赴任となり、エミコだけ田舎のトレーラーに残された。エミコの母親は日本から片道切符を送り、つらければ2人の子供を置いて帰国するように告げたという。

また、娘たちは母親の子育てがアメリカのやり方とは異なっていたことから、日本や日本文化を理解できないでいた時期があったことを明かした。

ケレン 「私にとって母は『母親』ではなく『同居人』でした。よその母親と全然違ったからです。同級生の両親は昔ながらの中西部の人たちでうちの家族にはない温かさにあふれていました。いつも私たちに厳しい母のことを父は『日本人だからさ』と言うだけでした。『日本人ってどんな人だろう』と考え始め自分が他の子とは違うことを意識するようになりました。子育ては大変だったと思います。親を敬うのが当然だと考えていた母は子供が自分に従うことを期待しました。でもアメリカでは勝手が違ったので混乱したでしょう。」

ケレンの日本人に対する理解は、周りにいるアメリカ人とは違う「他者」であったことが分かる。ルーシーも母親が子供たちに完ぺきを求めるのは日本の子育てのやり方であると理解し、一般のアメリカ家庭との違いに苦しんだことがあったと述べた。

ルーシー 「母は何事にも私たちに完ぺきを求め常に努力させました。中学生の時傷ついた思い出があります。自分の外見を始めすべてに多感な年頃ですからね。ある時女の子たちが泊まりに来てリビングでくつろいでいました。そこへあいさつに来た母が言ったんです。『うちの娘はバカで醜いのに仲良くしてくれるのね。』」

戦後のアメリカ社会で日本文化を保持する母親に育てられることは、アメリカ社会において娘自身も「他のアメリカ人とは違う自分」を意識することとなったようだ。

また、母親たちは戦後のアメリカ社会において日本人との混血またはミックス・レイスを育てることに對し、不安があったことも明かしている。例えば、ケレンと母親のエミコは以下のように語っている。

ケレン 「子供が半分日本人っていうのは不安だった？」

エミコ 「最初は気がかりだったわ。私の子供が半分日本人だから見下されるんじゃないかと思ったの。でも何も劣ってないわ。」

このようなミックス・レースであることへの不安は、特に20世紀初頭より強まった人種概念、とりわけ黄禍論に起因する。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、東欧やアジアからの移民が増加すると、優生学の考え方が様々に議論され、アジア人は劣等人種であり、混交により白人を劣等化させるという考え方が流布した<sup>16)</sup>。これは増加する移民への社会不安からくるものであった<sup>17)</sup>。

さらに、1662年にヴァージニア州で施行され、その後全州に広がった異人種間結婚禁止法があった。白人と非白人の結婚を禁じるもので、多くは白人と黒人の結婚を禁じていたが、州によっては白人とアジア系人種の結婚にも及んでいた。戦後が始まった1945年の時点では、30州に異人種間結婚禁止法が施行されており、そのうち14州が白人と東洋人の結婚を禁じていた。「戦争花嫁」移民が入国してからしばらく、全州で違憲になる1967年まで施行されていた。また、この法律が撤廃されても歴史的に構築されてきた結婚に対する人種概念がすぐに消えてなくなるわけではなかった。

## 「戦争花嫁たちのアメリカ」より：アメリカ社会における居場所作り

NHKBSドキュメンタリー「戦争花嫁たちのアメリカ」に登場する「戦争花嫁」移民の娘、ベリナ・ハス・ヒューストンは1985年に「戦争花嫁」の生きざまを描いた*Tea*という劇を制作し、1987年に初演されてから現在に至るまで繰り返し全米で上演されている。ドキュメンタリーの中でベリナはこの作品について、「*Tea*はわたしにとってとても大切な劇です。戦争花嫁の娘の世代として伝えたいことを表現しているからです。彼女たちの体験や私が彼女たちの話の中から気づいたことを劇に盛り込んだのです」と語っている。モデルはカンザス州に住む5人の「戦争花嫁」移民で出身地も夫の人種も違うという設定になっている。主人公であるヒミコに不幸が重なり自殺してしまう。その後、4人の「戦争花嫁」がヒミコの家を集まり、お茶を飲みながら日本での境遇やアメリカでの生活について語り合う。そこにヒミコも亡霊として表れて会話に参加したり、それぞれ自分の夫や子供になりきって心情を明かしたりする。タイトルになっている「お茶」がこの戯曲では大切な役割を果たしている。出身地、日本での境遇、夫の人種や文化、アメリカでの生活、それぞれが違う「戦争花嫁」移民の中にもお互いに偏見があるが、お茶を飲み語り合うことで不安を共有し一緒に乗り越えていこうという連帯感が生じることが表現されている。この戯曲*Tea*において、ベリナが特に伝えたかったセリフに以下のようなものがある。

「美味しいお茶を飲みながら私たち（「戦争花嫁」）は何も知らなかったことに気づく。夫のことも、子供を無事育てられるのかも、アメリカに祝福されるのかも。アメリカ人に必要とされず日系人も私たちに興味はない。だから家族が一番大事なのよ。」

「戦争花嫁」移民をアメリカ人に正しく理解してもらうため、戯曲を制作したと語るベリナは母親のセツコ・タケチについてこのように述べている。

ベリナ 「母は人生で本当にたくさんの対立を見てきましたが、同時にたくさんのよい友人を作ってきました。白人も黒人も関係ありませんでした。その人が人生に前向きであるか、心が善良であるかを見ていました。そうやって自分の居場所を築いたのです。」

そしてまた、母親のセツコは人種も文化も多様なアメリカ社会において「混血」である子供が前向きに生きていけるように道を作ってくれた人だと捉えている<sup>18)</sup>。ベリナの母親、セツコ・タケチは、アフリカン・アメリカンとネイティブ・アメリカンの血を引く男性、レモ・ヒューストンと結婚した。ベリナの育ったカンザス州ジャンクシオンシティは大規模な陸軍基地フォートレイリーがあり、そこへ勤務する人々とその家族が暮らす街である。古くからアメリカに住む白人と黒人以外に、第二次世界大戦期にアメリカ人兵士や軍属の人々と結婚してやってきたヨーロッパからの「戦争花嫁」も存在する。

ベリナ 「ある日、2人の黒人の女の子が走ってきて『混血児』と言いながら私を地面に押し倒したんです。一人がナイフを取り出したので刺されると思いました。彼女は2つ結んでいた髪の毛を切り落としました。母がどうしたのというので、髪を切られた、と言うと、母は『だいじょうぶよ。短くてもすごくかわいいから』って。そして母はもう片方の髪も切って、ショートヘアにしました。母はわたしに落ち込んでほしくなかったんです。」

「戦争花嫁」移民女性の歴史発掘という姿勢でなされた研究では、移民女性の苦労話に焦点が当たりがちであったがそれとは違い、娘のベリナによってアメリカ社会への居場所作りという前向きな語りがなされている。居場所作りという表現は、「混血」またはミックス・レイスの人々が容認されるように社会を動かしていく「戦争花嫁」移民の「主体性」が強調される。母親のセツコは、アジア系アメリカ人も、そして黒人も違うベリナがアメリカ社会で差別や偏見にさらされることなく生きていけるよう常に力強くしてくれた存在であったと述べている。

「混血またはミックス・レイスであることを誇りに思うこと」はベリナの息子、すなわち「戦争花嫁」移民であるセツコの孫であるキヨシ・ハス・ヒューストンにも受け継がれている。ドキュメンタリーの中でキヨシはベリナから聞いた話を以下のように語っている。

キヨシ 「母が子供のころ自分が混血であることに悩んでいました。すると祖父は店に行って3種類のアイスクリームを買ってきました。ストロベリー、バニラ、チョコレート、そして「混ぜてごらん」と言ったんです。母がスプーンでぐるぐる混ぜると、『元通りに分けることができるかい?』って。『お前はまさにこれだ、そしてお父さんだ。別のものを混ぜたら新しいものができた、もう分けることはできない、これが本質であり美しさなんだ。』そういう話からおばあちゃんたちが得てきた強さの秘密を知ることができました。」



日本人、ドイツ人、アフリカン・アメリカン、ネイティブ・アメリカンの血を受け継ぐキヨシは、「混血である」ということを前向きに捉えている。

しかし、先に述べたアメリカに古くからある人種概念に加え、このドキュメンタリーが制作された2019年は保守派の共和党であるドナルド・トランプ大統領政権下であり、アメリカへ渡ってきたエスニックマイノリティの人々やミックス・レイスの人々に対する排外主義が強まっていた。ドキュメンタリーでは、キヨシが現在のアメリカにおける「混血」の人々に対する状況を以下のように説明している。

キヨシ 「『あなたは本当にアメリカ人なの?』 こういう言葉は時として暴力になります。そして今「混血」の人に対する攻撃的なものが以前より強くなっています。何世代にもわたって移民が築いてきたアメリカがこんなことになっているのは大きな問題です。」

アメリカ社会では1967年にラヴィング対ヴァージニア判決によって人種による結婚の規制がなくなってもすぐに異人種間の結婚が進んだわけではなかった。「戦争花嫁」移民の子供たちは白人、黒人、アジア系アメリカ人というように単一の人種やエスニックコミュニティに属するわけではなく、日系と黒人、日系と白人というようにミックス・レイスとして戦後のアメリカ社会を生きた。先に述べた黒人の女の子たちに「混血」と呼ばれたベリナの体験は、黒人の血統があってもミックス・レイスと認識され黒人から異質な存在として扱われたことが伺える。

アメリカ人が必ずしも単一の人種に属するわけではなく、ミックス・レイスである可能性が公式に想定され始めたことの例として、1790年から10年ごとに実施されている国勢調査の人種項目が挙げられる。国勢調査の人種項目では、2000年になるまで人種は決められたカテゴリーからどれか一つしか選ぶことができなかった。例えば、1970年の国勢調査において人種を問う質問は以下のものであった。

4. 肌の色あるいは人種

○を一つ塗りつぶしてください。「アメリカン・インディアン」の場合は部族名も記入してください。「その他」の場合は、人種を記入してください。

○白人	○日系	○ハワイ系
○ニグロあるいは黒人	○中国系	○コリア系
○インディアン（アメリカ）	○フィリピン系	○その他（記入してください）

記入欄 \_\_\_\_\_

図1：1970年の国勢調査における「肌の色あるいは人種」に関わる質問<sup>19)</sup>

1970年の国勢調査に見られるように、人種は既存のカテゴリーのどれか一つに属することが想定されていた。「一つ以上の」人種を選ぶよう明記され、国勢調査でミックス・レイスであることが想定されるようになったのは2000年になってからのことであった。以下は2000年に実施された国勢調査の人種項目である。

6. あなたの人種は何ですか。一つ以上をマークして、あなたの考えを示してください。

白人

黒人、アフリカ系アメリカ人あるいはニグロ

アメリカン・インディアンあるいはアラスカ先住民——所属している主要な部族名。

アジア系インド

日系

先住ハワイ人

中国系

韓国系

グアム系あるいはチャモロ系

フィリピン系

ヴェトナム系

サモア系

その他アジア系——人種名を記入。 その他の太平洋諸島系——人種名を記入。

その他の人種——人種名を書いて下さい。

図2：2000年の国勢調査における「人種」に関わる質問<sup>20)</sup>

このような人種の選択肢が2000年まで国勢調査になかったことに反映されるように、「戦争花嫁」移民の子どもたちが生き抜いた戦後50年は特にミックス・レイスとしての居場所をアメリカ社会に作るということは重要な課題であった。既存の人種カテゴリーに属さないことはアメリカ社会において他者化されていること、排斥されていることを意味していたと言えるだろう。

ドキュメンタリーの最後で、キヨシはトランプ政権下の保守化する時代を乗り越えようとするとき、「混血」またはミックス・レイスの居場所がなかった戦後の時代、家族を守りながら子育てをした祖母のセツコであれば以下のようなことを言うであろうと述べている。

キヨシ 「おばあちゃんなら2つのことを言うでしょう。ひとつは家族を守るということ。ふたつ目は彼女の人生そのものですが、他人を攻撃する人に対しておばあちゃんはいい加減な態度をとることはありませんでした。相手としっかり話をして、よくないことはよくない、とはっきり言うでしょう。あなたはこうしたいかもしれないけど、それは正しくない。自分の意見を証明するために相手を傷つける必要はないと。相手が一人であっても大勢であってもやさしさと慈愛をもって接しなさいと言うでしょう。おばあちゃんにとってどの国の出身か、どの人種かなんて関係ありませんでした。重要なのは思いやりをもって人に接しているかどうかだけでした。」

孫のキヨシは、戦後アメリカ社会に居場所がなかった祖母のセツコが子供を守り、居場所を作り、前向きに生きたことを認識している。戦後の変わりゆく時代の中でアメリカ人兵士・軍属との結婚が生じ、何万人と言う数の日本人女性がアメリカ人の妻になるという歴史的に例のない現象が生じた。「戦争花嫁」移民は現在、多くの女性たちが90歳を超え高齢化しているが、娘たちや孫は、「戦争花嫁」移民である母親たちが数年前まで敵として戦っていた国で、さらに人種、文化の違いから居場所のなかった国で、前向きに生きて自分そして家族の居場所を作ったことを認識して

いた。そして保守化するトランプ政権下において、再び人種による排外主義が強まるアメリカ社会を生き抜こうとする孫のキヨシにその術は伝わっているようであった。

## おわりに

本論文では娘や孫の視点に着目することで、戦後、日本という敵国からやってきた日本人女性という視点から離れ、アメリカ社会でミックス・レイスの子供を育てた母親としての認識が可能となった。さらに、孫のキヨシの視点からは、祖母のセツコがミックス・レイスの子供を守り、育てた人として、そして、アメリカ社会で積極的に自分や家族の居場所を作った人として認識されていることが分かる。

先行研究において、80年代半ば以降に「戦争花嫁」移民の歴史に興味関心がもたれ、戦後のアメリカとの国際関係構築の中で彼女たちの存在は日本への貢献と捉えられるようになったが、アメリカ社会への貢献という側面はあまり着目されていない。80年代に進められたアジア系アメリカ人研究における多文化社会アメリカでの「戦争花嫁」移民の意義に関する研究においては、アジア系アメリカ人の研究枠組みの域を脱していない。しかし、1945年の時点でアメリカ国内には異人種間結婚禁止法が30州施行されており、戦争花嫁法という特別措置で結婚が許可された日本人「戦争花嫁」はアメリカ国内において戦後いち早くミックス・レイスを生み、育てた点が明らかになる。この点は、アメリカの戦後の軍事力拡大が人種の境界線を越えた結婚や家族形成をもたらした側面だと言えるだろう。そして、日系という人種カテゴリーにも白人または黒人という単一の人種カテゴリーにも当てはまらない「戦争花嫁」の子供たちは戦後のアメリカ社会においてミックス・レイスの先駆けとして生き抜いてきたと言えるのではないだろうか。今回はドキュメンタリーに焦点を当てているため、ドキュメンタリーから読み取れることの一考察に限られたが、今後さらに「戦争花嫁」移民が戦後アメリカ社会でどのようにミックス・レイスの子供たちの子育てを行ったのか考察を深めていきたい。そして子供たちや孫世代にインタビュー調査を行い、戦後の「アメリカ社会」における単一的な人種のカテゴリーに抗う側面や、日系とのミックス・レイスであることをより肯定的に捉える動きや活動などにも着目してみたい。

## 注

- 1) 「戦争花嫁」という呼び名については、この名自体が差別語であるという意見もあった。「国際花嫁」という言葉に変える研究者もいるが、1990年代以降徐々に女性たち自身の間で肯定的に認識されるようになったので、本稿では戦後期にアメリカ人兵士・軍属と結婚してアメリカへ移住した女性を「戦争花嫁」と呼ぶ。
- 2) ドキュメンタリー「七転び八起き：アメリカへ渡った戦争花嫁物語」に関する公式ウェブサイト：[fallsevengetupeight.com](http://fallsevengetupeight.com)
- 3) ほとんどは日本人女性のアメリカへの同化は進んでいると結論付け、多様なアメリカ社会の同化可能性を提示するものであった。例えば、Anselm L. Strauss, "Strain and Harmony in Japanese-American War-Bride Marriages," *Marriages and Family Living* 16 (1954); John Conner, *A Study of the Marital Stability of Japanese War Brides* (San Francisco: Rand E. Research, Inc., 1976); Romanzo Adams, *Interracial Marriage in Hawaii: A Study of the Mutually Conditioned Processes of Acculturation and Amalgamation* (NJ: Montclair, 1937).
- 4) 例えば、Kim, Bok-Lim, "Asian Wives of U.S. Servicemen: Women in Shadows," *Amerasia Journal*

4.1(1977): 91-115.

- 5) 例えば、Evelyn Glenn Nakano, *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service* (Philadelphia: Temple University Press, 1986)やStorrs Debbie, "Like a Bamboo: Representations of a Japanese War Bride," *Frontiers: A Journal of Women Studies* (2000): 194-224がある。
- 6) スタウト・梅津・和子は1984年の海外日系人大会に招かれた「戦争花嫁」移民の1人で、当時の美智子妃殿下に「言葉も習慣も違った国で、皆様、ご苦労なさいましたでしょう。皆さんにご苦労様でした、感謝しています、とお伝えください」と声をかけられた。この言葉をきっかけに、過去の汚名を心の奥に抱えた同じ「戦争花嫁」に美智子妃殿下の言葉を伝えたい、と全米にいる「戦争花嫁」に700通以上の招待状を送った。320名が集まり1988年戦争花嫁渡米40周年記念大会を開催した。この大会の成功の後、1989年にスタウト氏は「国際結婚親睦会」を設立した。設立当初は150名程度の会員で、2000年のピーク時には500名以上に達した。2004年のハワイ大会まで計5回大会を開いて、そのたびに150名程度の花嫁が集まり、草の根の日米交流に貢献しているという認識を共有し合った。
- 7) 江成常生『花嫁のアメリカ』（講談社、1981年）、『花嫁のアメリカ歳月の風景1978-1998』（集英社、2000年）。新田文輝「海を渡った日本女性-戦争花嫁再考-」『吉備国際大学社会学部研究紀要7号』1997年、165-175頁。
- 8) 安富成良、スタウト・梅津和子『アメリカへ渡った戦争花嫁：日米国際結婚パイオニアの記録』（明石書店、2005年）、日本人「戦争花嫁」移民の功績を称える論調の著書に林かおり『戦争花嫁：国境を越えた女たちの半世紀』（芙蓉書房出版、2002年）などがある。
- 9) 占領を機に結婚が生じた連合軍兵士の出身国はアメリカのほかにも、オーストラリアやイギリスがあり、オーストラリア兵士との結婚はおよそ650件であった。また、日本に駐留して日本人女性と結婚した者は兵士だけでなく軍属の人々も含まれる。
- 10) "Marriage to Japanese Nationals," RG 407 box 717 file 291.1., January 10, 1947.
- 11) "Application for Permission to Marry Japanese Nationals," March 21, 1950, RG 338 Box 115 File 291.1.
- 12) *Pacific Citizen*, August 30, 1947. *Pacific Stars and Stripes*, Aug. 22 1947.
- 13) Kalischer Peter, "Madam Butterfly's Children," *Collier's*, September 20, 1952.
- 14) ドキュメンタリーでは、監督である娘と母親の会話は英語で、日本語の字幕がつけられている。本論文は字幕の日本語表記で統一する。
- 15) アッコが女学校の友人たちと新聞に載せた広告は以下の通りである："WELL-EDUCATED Japanese lady wants to teach foreigners Japanese language in exchange for English conversation, preferably in the morning. Apply Box 204, Nippon Times, Tokyo."
- 16) Richard B. Sherman, "The Last Stand: The Fight for Racial Integrity in Virginia in the 1920s," *The Journal of Southern History*, Vol. 54, No. 1 (Feb., 1988), 72. この論文では、1920年代に白人と非白人の混交では、より原始的で程度の低い人種の血統が引き継がれるという見方が流行し、白人人種が悪化して高い文明が損なわれると議論されたと論じられている。
- 17) Pascoe Peggy, *What Comes Naturally* (Oxford, 2009), 88-89.
- 18) 「混血児」という言葉は言葉の使用自体が差別的であるという議論があり、近年はミックス・レイスという言葉が使用される傾向にある。しかし、ドキュメンタリー「戦争花嫁たちのアメリカ」の中で、ベリナ・ハス・ヒューストン自身の言葉の字幕に「混血児」とあることからここではドキュメンタリーの中で使用されている語彙も併記する。
- 19) 南川文理『未完の多文化主義：アメリカにおける人種、国家、多様性』（東京大学出版、2021年）、105頁参照。
- 20) 同著、248頁参照。